れる優雅な琵琶の演奏に聴き惚れていた。

東都旭会第四回演奏会

四月十六日(土)昼東京板橋区民会館、会主藤巻旭鴻氏。舞踊藤間敬之亟社中四人、茶道上原和仙社中九人、笛二人、琴一人の特別出演の豪華版（千円）。千鳥連曲｜会員一同▼大楠公｜柴田旭容、東野旭枝・紘旭章▼春に歌わん｜松元旭川・紘旭映外三人▼若き敦盛｜藤巻旭星、清田旭茜・紘旭鴻、笛一▼華道華の恵み｜黒田旭英・紘旭薫外二人、華道三人▼五木の子守唄｜藤巻旭鴻・紘旭史外三人小紘旭陽、琴一、笛一▼天の羽衣｜大野旭翠、橋上旭英・紘旭鴻、旭彰・笛一、立方▼お蝶夫人｜藤巻旭祐、初谷旭憲・紘旭陽外一人▼舞曲一番｜藤巻旭陽外三人・琴一、笛一▼北の庄｜南崎旭薫、石岡旭呂・紘旭彰▼衣川｜旭川、古川旭冷。紘旭陽▼吉野山懐古｜宮田旭嘩・紘旭彰外三人、笛、立方▼茶道松風の曲｜藤巻旭陽・紘旭川外三人、琴一、点前▼黒田節｜藤巻旭鵬・紘旭彰外六人、小紘旭陽、琴一、笛二、立方▼壇の浦｜林田旭史、内田旭章・紘旭陽▼唐人お吉｜藤巻旭彰、古川旭神・紘旭鴻外一人、笛一▼春の調べ｜旭祐、旭憲・紘旭章外三人、琴一、笛一▼羅生門｜会主藤巻旭鴻。

岩間寛水奥伝披露演奏会

四月十七日(日)昼名古屋市大須中小企業福祉会館、主催同氏、後援浩水会外。粟津ケ原｜水谷浩水▼菅公｜柴田▼紅葉狩｜山田▼重衡｜長谷川▼桜狩｜成田▼羅生門｜菅沼穰水▼大楠公｜大西紘水▼小栗栖｜丹野鯱水▼西郷隆盛｜三輪椛水▼別れの盃｜小林残水▼乃木将軍｜神藤敏水▼城山｜会主岩間寛水▼屋島の誉｜阿部勝水▼曲垣平九郎｜志水旭城▼茨木｜田中訴水▼舟弁慶｜奥村慧水▼三成の最期｜橋谷岳暘（以下来賓）須磨の敦盛｜北海道林尚水▼鴨川の露｜京都矢吹旭美津▼湖水乗切｜東京半田鶴朱▼天目山｜同谷暉水。

ラヂオ琵琶放送

四月十四日(木)午後三時NHK・FM。都落ち｜押川旭葉女史。湖水渡｜田中旭嶺女史。

阿部勝水女史転居

名古屋市中川区中島新町中川住宅五ノ四〇一（郵便番号四五四）に転居

告

○：京都琵琶協会五月定例茶話会　五月一日(日)昼一時会員梅原旭濤女史宅（向日市西向日町下車直ぐ。電話〇七五(九三一)一六九一番）

○：新緑琵琶名流の会　五月六日(金)昼一時東京萱場町証券ホール、主催日本琵琶楽協会。

○：第六回春の定期演奏会　五月二十二日(日)昼一時博多駅前大博多ビル。主催博多旭蝶会、後援県市教育委員会外。琵琶、琴、尺八合奏「春」外十二曲。賛助出演植村寞水。

○：復活二十周年記念演奏会　五月二十四日(火)夕六時東京新宿駅前安田生命ホール、主催浅野晴風氏。琵琶舞「石童丸」を永田咏晃女史協賛で晴風氏演奏。

○：各流派合同琵琶演奏大会　六月五日(日)正午京都市烏丸夷川上ル京都商工会議所三階大ホール、主催京都琵琶協会。会員の外筑前山崎旭萃女史（大阪）、錦心流阿部勝水女史（名古屋）両名手協賛出演。

○：松岡旭岡氏琵琶七十周年記念演奏会　六月五日(日)神戸市長田町能楽堂、主催旭岡会。

昭和五十二年五月一日発行（非売品）
〒569　発行所　高槻市津之江北町一一ノ二三　水社
編集者　京植寞　村紘
電話〇七二六(七三)六〇五一番

あとがき

名勝摂津耶馬渓の下流で高槻市の中央を貫通する清流芥川堤防の桜並木も花の命は短くていつしか盛りを過ぎすがすがしい葉桜が五月の風にそよいでいる●先月日本琵琶楽協会の関西支部発足総会が別掲の通り京都で開催され多数の有力な琵琶演奏者が集って今後の活躍に邁進することを契い合った●流派を超越しそれぞれの長所を発揮しながら一団となって琵琶楽の発展に志し仲よく手をつないで健弾するということは時代に即した有意義な企画で誠に結構なことである●門戸を閉ざして各々流派孤立の時代は既に去った●薩摩系も筑前系も排他的の精神を拭い去って一致団結しオール琵琶楽の振興発展に意を注ぎ、併せて次代を担う若い人の養成に心がけたいものである●話は変るが春闘の交通ゼネストは誠に困ったもので書き入れ時の四月五月に各地演奏会もこれがため計画に支障を来たし迷っていられる向きも少なくなかろう、毎年のことながら何とかならぬものか●気候のよいのも玆しばらくでやがて月が変れば又うっとうしい梅雨を迎えねばならぬ、お互い健康には充分注意しましょう。

琵琶機関紙　京絃　第二七五号　京絃社

薩摩琵琶とその周辺（十五）

露に与えた仏外相の提言＝米大統領の媾和仲介の親書＝外国観戦武官や記者の批評＝我軍の機関銃の採用＝下瀌火薬の偉力

東京　坂本錦道

（前承）さて敵の主力艦アリョールは、第一戦の折は主戦場より遠くに在り被弾はなかったが、この日の午後六時の第三次砲戦の時は、東郷側の集中砲火を浴び瞬時にして戦闘不能に陥ってしまった。この艦は捕獲され戦は終ったが、東郷提督は撃沈を避けて朝日、薄雲、浅間を附して佐世保に曳航を命じたが、余りにも酷くやられているので急遽計画を変更して舞鶴までやっと引っ張って来た。そこで日本側ではこの艦の被弾の痕を詳細に調査した。その結果として十二インチ砲一二、八インチ砲七、六インチ砲二二、口径不明弾二三というその命中度に、日本側調査員や見学に参加した列国海軍駐日武官は驚嘆したという。

◇英国機関将校の談＝日本海軍最大の手柄は艦隊の心臓部である機関に故障を被ることなく海権を維持したる方法である。その原因はベルヴィーニ汽缶に基く。即ち日本は単に一式の汽缶を使用し、一艦より他艦に機関兵を後援に転乗せしめるも一向に差支え無く、直ちに実効を発揮し得るに反し、バルチック艦隊は一艦々々雑多なる形式（五種以上に及ぶ）を有し、他艦より転乗せしめても方式の違いによって即刻の用を便ずる能わず、之れは艦の構造上に重大なる誤りを冒していた。云々。

機関銃の採用と下瀌火薬の偉力＝日露両軍最後の乾坤一擲の奉天大会戦と、バルチック艦隊との一大決戦も日本軍の一方的圧勝によって終りを告げた。玆でこの戦の反省として色々な角度よりこの分析が行われた。我が乃木将軍の率いる第三軍が旅順攻略に於て、露軍の機関銃の前には手も足も出ぬ苦渋を喫したのに鑑み、日本側は財布の底をはたいて列国の軍器メーカーより買い集めた機関砲（銃）は二百五十挺余にのぼり、之を持って奉天に臨んだ。そこでロシア側の持つこの新式銃は五十挺という僅かなものであったが、日本軍の新式銃は始めての事で操練不足もあったが、兎も角異想外の偉力を発揮し得たのである。

更に世界の軍事評論家の瞠目したのは、あの日本海の大海戦に東郷艦隊の使用した火薬である。その頃世界海軍国の間に脅威の的となっていた「シモセ・メリニット」で、我海軍の秘密兵器の首座にあったもの。これは海軍技術監下瀬雅允工学博士の苦心開発せるもので、ピクリン酸を弾丸の炸薬とする方法で、日清戦争の時は試験的に採用されていたが、明治三十二年頃から大量生産を開始して、日本砲弾の重量の一四%も装填されている。ロシア側の砲弾が二、五%に比し五倍以上の大量が加味されている点である。

ロシア海軍は徹甲弾に重点を置いたが、信管は遅鈍で爆発より貫徹による撃沈を狙った、然し当ったとしても弾径だけの穴は直ぐ填塞されて沈没を誘致することはない。世界海軍国の通説として、水線鋼帯を有する戦艦は魚雷若しくは機雷で沈没するとしても、砲戦では仲々沈没するものではないとされている。あの海戦の最中に我浅間、浪花が一時戦列を脱したが、急遽填塞を終って再び戦列に復帰した如くである。然らば我秘密兵器の下瀌火薬の驚くべき炸裂の偉力は、そこで炸裂して大穴をあけその周辺の一切を破砕する、ロ提督も重傷、ボロシノ艦長セレブレニコフ、アリョール艦長ユングもこの下瀌火薬の犠牲となり、艦上に炸裂すれば忽ち将兵を傷け、大火災を発生しその消火に努めるうちに戦力を失うという恐るべきものであった。（以下次号）

続・私の音楽ノート（四）

全集のはなし（後）

水藤五郎

長唄を一曲覚えるにあたって、一枚のレコードを買い求め、又、更に一曲覚える為に一枚をと云う繰返しがつづいて、自然と二十数枚のレコードがたまりました。

良い声になりたいのなら、毎朝美声をきいて、一日それを求めなさい、と云って母は私を励まして呉れました。伊十郎師のレコードテープが私の目覚しになって一年程たちました。が、四十一年、その師が病に倒れ、二度とその勇姿と演奏が聞けなくなった時、このレコードが宝となりました。芸術家が、その生命を失なうこととなく永遠に人々の心に残り得るとしたら、それは美術や、文学等の、空間芸術にたずさわる人々に与えられた特権であったのでしたが、今日の科学が、その特権を音楽家、とりわけ演奏と云う、空しく時と共に消えてゆく芸術活動にたずさわる人々にも分け与えてくれました。このレコードがある限り、師の芸は消ゆることなく、毎日燃えつづけているわけです。

コロンビアレコードでは、そのレコードを集合して、全集として売り出しました。当然それを買い求めたのでしたが、全集病の症状としては初期であったかも知れません。

しかし、伊十郎師の世に亡き今日、その至芸を全集化した功績は、測り知れない価値があると思えてなりません。二度のレコード買いと云う損失はとるに足らぬものでありました。

いや、それ以上に私は大きな損失をしました。四十一年秋、松田静水師が病に倒れました。この時の私の驚きは、今でもはっきりと体によみがえってきます。

まだ入門三ケ月目の私が「河内の宿」を習っていた折で、丁度その日は稽古日で、田町の御自宅を訪ね、外出先での事故を知りました。暫らく御邪魔をして、連絡を待っている時の不安な気持、辞去して、池袋行きの山手線の中での心の動揺、足がガタガタとふるえました。大変だぞ!!と云う気持ち、その知らせを聞く母錦穣の驚き等、いろいろでした。以来、静水師の至芸をなぜ記録して置かなかったのかと云う無念さが私の心を占めてきました。

たまたまある、師のレコード、テープは僅かであり、又、個人所有のものである場合には、なかなか手易く入手も出来ないのであります。もし、これがなされていたならば、多くの錦心流の人々はもとより、琵琶人の全てがその心の中に、静水師の芸を燃やしつづけることが出来ました。

この後悔の念が、母錦穣のテープ全集の作成にすゝむ動機となりました。レコード会社は琵琶界には目もくれません。たまに目を向けたとしても、個人の全集作りなどは思いもよらぬのが実状でした。

戦前はビクター専属であった母も、戦後は十枚程しかレコード化はしていないのでした。私は、伊十郎全集の存在を喜こび、静水全集を作り得なかった悲しさを思って、なんとか自己製作で錦穣全集を完成させようと思いました。最初は、会員の人々のため、いや私自身の心を充たすための製作でした。

しかし、如何に私が騒ごうとも、御本人の錦穣が同意しなければ事はすゝみませんでしたから、私が考えた通りには参りませんでした。又、元気で活動する本人を見れば、病気や死後のことを考えてなどと云う理由を強く主張するわけにもゆきませでした。

が、六十才を現実にしてから、母の考えも、後世に遺すべくと云う希望が生まれたらしく私の主張を呑むようになりました。私は二年間にわたり、毎月二曲ずつの録音計画を立て、その間の諸企画を練りました。そしてこのテープ全集作成をしるしたパンフレットを多くの方々に送り、御声援を乞いました。これはテープの頒布が目的でなく、その内容、つまり、演奏曲目、録音内容等への御意見が広くいただきたかったからでした。

演奏家は聴き手に依って育ってゆきます。ましてや、錦びわ、いや母の活動は聴き手を意識して、それ等が反映して成り立ってきたものでした。全集化着手への励ましの手紙がぞくぞく寄せられてきました中に、鈴木流泉師を始め、数十名の弾奏家のお名前を見たとき、母も私も、何んとも云えぬ緊張感と嬉しさがありました。

それは、伊十郎全集が、商業上の成果にとどまることなく、それ以上に、芸術成果を上げ得た背景には、長唄界そのものの支援と声援があったからとの事実を知っていたからでした。ファン以上に、同じ道にたずさわる人々が認め、励ますと云う行為がなければ、この全集作りは意味のない自己保存になってしまいます。

斯界百年の為に作る、又、作らせると云う多少オーバとも思える自負心と責任感、演奏者、聴き手、そして周囲の人々の連帯がなければ出来ないものと思っていました。

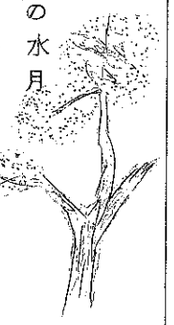
道なかばにして、この努力は絶えてしまいましたが、多少なりとも記録し得たことの喜こびと、後世に対する責任感の半分を果たし得た安心感があります。

が、こゝ数年、吉水錦翁師、大舘洲楓師等の名人が逝き、その至芸の尊さを思う時、またまた私には新たな後悔が生まれてきます。なんとか、斯界の中で、記録し得るものを残したいと願い、全集病を自負し、それで死ぬるもまたよしと思っているのであります。

伊賀の水月

荒木又右衛門の仇討ち

辻旭城



徳川幕府時代、武士が同僚から暴力を加えられると、その被害者の方も直ちにこれに反発して暴力に訴えた。それが仇討ちである。

この時代法律というものは無く、仇討ちは非難どころか却って賞讃されたのは衆知の通りである。それが明治になって、個人間の争いの解決に暴力を用いるのを禁止し、法律によって国が黒白をつけることになった。

明治時代は国内も平穏に治まっていたが、昭和の敗戦によって国法を失った国民は、自分の欲望の赴くままに兎角他人の迷惑を無視した行動に出て、無責任な戦後生まれの男女達は、男やら女やら判らない格好で自信と勇気を失い、その結果が子弟を徒らに甘やかしてしつけが出来ず、外国から入った安易な民主々義という美名の陰にかくれ、至る所に大小の暴力が横行していることは残念至極である。

かって時代劇映画華やかなりし頃、男優たちが一度は荒木又右衛門役を演じてみたいと願ったという。筆者も若い時分、又右衛門生涯のクライマックス〝鍵屋の辻の決闘〟の場面を、映画や浪曲、講談で見聞きした。鉢巻に手裏剣をさした勇ましい又右衛門の姿が今も脳裏に残っている。

今から約三百五十年前の寛永十一年（一六三四）十一月七日の辰の刻（午前八時）、義弟渡辺数馬を援けて伊賀の国上野城下の町はづれ、小田博労町の三ツ辻で激しい斬合いが始まった。この血闘について文献をあさってみたところ、さしたることではなかった。備前岡山藩池田家の若い藩士たちの間で流行していた男色の争いの果ての刃傷だった。

が、殺害されたのが藩士の恋童で、殺した河合又五郎が旗本屋敷に逃げこんだところから騒ぎが大きくなって来た。大名の面目と旗本の意地、それに又右衛門や甚左衛門、半兵衛ら武士の義理がからんで三ツ巴になり、遂に幕府を動かす程の大事件になっていた。

男同士でも、女同士でも恋の恨みは恐ろしい。

鍵屋の辻での血闘は、正式の仇討ちでも上意討ちでもない。大名側と旗本側との寛永武士を代表するオトコ達の決闘であった。

前夜来の雨も止んで上野城はくっきりと白壁をのぞかせていた。折から鍵屋の辻に通りかかった騎馬十一人の列を目がけて、四人の武士が白刃をふるって斬り込んだ。渡辺数馬（17）とその姉婿荒木又右衛門（36）、それに若党川合武右衛門（43）、同森孫右衛門（38）で、襲われたのは河合又五郎（24）、叔父河合甚左衛門（41）、又五郎の姉婿桜井半兵衛（24）らの一行である。

三ツ辻にある粗末な茶店鍵屋の物陰から突進した又右衛門の一撃に、馬上の甚左衛門の左脚が血しぶきを上げて地上にころがった。名刀関の孫六を手に仁王立ちの又右衛門に対し、腰の愛刀虎徹に手をかけた甚左衛門は、その途端、馬が足掻いて棒立ちになり、馬から転落した。落馬しながら甚左衛門は抜刀しようとしたが、駈け寄った又右衛門は甚左衛門の脳天めがけて一の太刀を叩きつけた。

鍵屋の向かい、萬屋の陰にひそんだ郎党武右衛門と孫兵衛は、馬上の桜井半兵衛に突撃した。半兵衛はカスミの半兵衛の異名を持つ槍の名人で、家に伝わる丁字型の槍で武右衛門の脇腹を突いた。武右衛門はこれに屈せず半兵衛の槍持三助の右腕を斬り落とした。

決闘はながく続き凄絶な光景を呈した。血に染った腕や脚があちこちにころがり、河合甚左衛門の遺体が横たわっている。全身に十一か所の手疵を負った森孫右衛門、深傷三か所の川合武右衛門も路上にうごめいている。その先の町家の軒下には桜井半兵衛が倒れ、双膝を薙ぎ払われれ若党湊江清右衛門は死の直前に瀕し、その手前には槍持三助の斬られた右腕が地上にあり、少し離れて片腕のない三助の体がころがっている。

又五郎と数馬の争闘は凄まじいものであった。互いに斬撃を繰返しながら双方傷つきつつ尚も斬り合いを続けたが、やがて数馬の気力が衰えはじめ、危うくなって来た。又右衛門はそれまで助太刀をせずに眺めていたが、遂に手裏剣をとって又五郎の眉間に打ち込んだ。眉間の鮮血が左の眼に入ってひるんだ瞬間、数馬は夢中で一太刀を又五郎にあびせ、二の太刀は又右衛門が受持って目出度本懐を達したが、この闘争は実に六時間の長きに亘って行われたのである。

この仇討は、公議では幕府の治政下でなくタブーとされ、ひたすら隠し続けられた。鍵屋の辻での荒木又右衛門が、琵琶をはじめ映画や歌舞伎、浪曲講談などで華やかに世に伝えられて行くのは、又右衛門の死後百余年の歳月を待たねばならぬ。当時の記録は伊賀上野の城主藤堂家の公文書にも無いし、決闘を目撃したであろう当時の武士や町人達が書きとめた記録さえ、何一つ残っていない。総てが政治の霧の中の事件である。

決闘後の又右衛門は、生まれ故郷伊賀上野の藤堂家で四ケ年ほどお預けの後、因州鳥取の池田家に移された。

大阪夏の陣（六）

山川流水

記録文献によると、浅野但馬守は家康から出陣を促されて元和元年（一六一五）四月二十八日、兵五千を率いて和歌山城を進発した。この情報を知った大阪方は急いで迎撃軍を編成し、大野主馬治房を総大将に兵三千で泉州路を急いだ。

「日本戦史・大阪役」に従えば二十八日昼一時、浅野部隊の先頭は佐野の市場（泉佐野市）に、本隊は信達（泉南市）に着いた。

丁度佐野には大阪方、大野治長の謀略将校が潜入していたりして、之を捕えるさわぎがあったりしたためか、浅野軍はそのまま宿営する。夕七時過ぎから浅野陣地前方がざわめいてきた。夜半の零時頃大阪方二万の兵力が、二十九日に和歌山を攻撃するという情報が入って、深夜の作戦会議となる。

浅野佐衛門佐は「先頭陣地のある市場で戦おう」と主張すると亀田大隅は「市場は山から遠く東に離れて西は海岸に近い、広々とし過ぎている。これでは兵馬の駈引が自由自在で、わが少数兵力では敵の大軍に対して不利だ。後方の樫井迄退いて戦うべきである。その蟻通明神の松林を前にして布陣、八丁畷から銃撃しながら後退するのが得策だ。松林の陰になってわが兵力を敵は知ることが出来ないし、また道は左右が泥沼だし浅いから、兵力を散開して攻めてくることが出来ぬ。これでわが軍が勝つ」と反論した。退却を卑怯とする佐衛門佐と鋭く対立したが、但馬守の裁決で大隅の作戦計画が通る。

早速亀田大隅は安松に、浅野右近は長滝に退き、佐衛門佐も樫井まで退いた。深夜から降り出した雨は明け方にやんだが、霧の深い

朝だった。

大阪方の塙団右衛門が市場まで進出してみると、敵は既に退却したあとで、部下は直ちに追撃しようと訴えたが団右衛門は慎重だった。和泉路に詳しい淡輪重政と紀伊路に詳しい山口兵内、兵吉兄弟を連れて、自ら敵状偵察に出かけた。

樫井合戦はこうして始まる。

市場は南海本線泉佐野駅から近い。今は泉佐野市の中心街である。浅野部隊がここから後退して布陣、東西の合戦場となった一帯は同市の西部地区で、羽倉崎駅南方の長滝、樫井を中心にして樫井川も血に染めた。羽倉崎駅から南二キロに蟻通神社があるが、これは昭和十八年、大平洋戦争でそれまでの場所を飛行場にするため追い出されて引越して来たもの。それまではこの北東約一キロの地点にあって、昔は朱の鳥居に蟻通大明神の額がかかり、四面が林であったという。

余談ながら清少納言の「枕草子」によると、昔、唐の国が日本攻撃に先立って日本の智恵を試そうとした。丸太の本末を当てさせようとしたり、蛇の雌雄の鑑別を質問したりして来たのに対して、日本は皆正解を出した。第三問は七曲がりの玉の両端に穴の通ったのを贈って来て、これに紐を通してみろ、という。

時の日本の宰相は若者ばかり可愛がって四十才を過ぎると殺してしまうので、皆遠くへ逃げたりして都に老人は皆無だった。ところが親孝行な中将が居て、七十近い両親を自宅に穴蔵を造り、ここに隠して養っていた。

唐の国の難問に苦しむ宰相をみて、気の毒に思った中将が老父に相談すると、そこは年の功、第一問も第二問も教えてくれた。そこで又第三問も老父にたづねた。

「大きい蟻を二匹捕えて腰に細い糸をむすびつけ、それにまた太いのをつける。玉の一方の穴の口に密（みつ）を塗りつけてみよ」と教えてくれた。その通りにして反対側の穴から蟻を入れると、密の香につられて穴を通り抜けて紐を通すことが出来た。

これを唐に送ると「日本は賢（かしこ）い国だ」と驚いて、攻撃するのを中止した。

宰相が中将に「官位などに望みはないか」と聞くと「どんな位も欲しくない、ただ隠れ消えている男女の老人達を都に住まわせて頂きたい」と注文した。これが許されてみんな喜んだ。中将は大臣にまで出世したが、後にこの人が神様になったのだろう。

蟻通明神に参詣すると、その夜の夢まくらに現れて、この由来を教えて下さるという。

言寸（35）

和泉式部

平安中期の歌人。色ごとにたけた美人で藤原定家との熱恋は有名。

「大江山いくのの道の遠ければまだふみもみず天の橋立」の小式部内侍の母。その橋立近くに歌碑が残っている。

さめやらぬ夢

―西海に消えた右京大夫の恋―

寿永四年春、平家一門が西海の藻くずと消えたとき、都に残されたゆかりの人々の心もまた、生涯消えぬ悲しみを味わいました。

もと建礼門院に仕えて、右京大夫と呼ばれていた彼女もそのひとりでした。彼女の恋人平資盛も、海に沈んだのです。右京大夫は教養の豊かな父母の才能をうけついで、歌にも音楽の道にもたけた若い美しい女でした。

はじめて高倉帝の中宮建礼門院徳子の宮廷に出仕したのは十六、七のころ。若い帝と中宮を中に世は平家のおごりの春、全盛時代でした。ときめく平家の公達や殿上人があまたある中で、彼女は、一つ二つ年下の資盛と恋におちました―華やかな宮中暮しをしていても浮わついたことはするまいと、かたく思いきめていたのに……。

「おもひのほかに物思はしきことそひて、さまざま思ひみだれしころ」と、彼女はのちに自分の歌日記〝建礼門院右京大夫〟に書いています。

資盛は重盛の次男、入道相国清盛の孫になります。正妻もいる身で人目をはばからねば

ならぬ物思わしい恋でしたが、彼女にも資盛にもいちずな真剣な恋でした。しかし世はただならぬ騒ぎに巻込まれていました。高倉帝の崩御、清盛の死去をさかいに、栄華を誇った平家は音たてて没落していきます。そして遂に寿永二年七月、平家は幼帝安徳天皇を奉じて都を落ちます。あわただしい別れに、資盛は彼女にいいました。

「もう生きては都へ戻れないだろう。これから先は便りもしない。だが、あなたをおろそかに思ってのことだとは思わないでほしい。自分でそう気強く思い切らないと、未練が残ってつらいのです。死んだと聞いたら、せめて菩提をとむらって下さい。」彼は流石に嫡嫡の平家の大将、男らしくそう云い捨てて、別れてゆきました。それが今生の別れとなりました。

平家があそこで討たれた、ここへ落ちたと聞くたびに、右京大夫の胸は不安と悲しみで張りさけます。「夜の明け、日の暮れ、何事を見聞くにも片とき思ひたゆむことは、いかにしてかあらむ」どうかしてせめてもう一目、と思う心が通じたのか、ある夜の夢にいつもと同じ姿で、風のひどく吹く所に、「いと物思はしげに打ち眺めてあるとみて、さわぐ心にさめたる心地、いふべきかたなし」。

平家敗戦の悲報は次ぎ次ぎにもたらされました。討たれた人の首が都へ運ばれてさらされ、或いはいけどりになった人、入水したと聞く人、…ついに恐れていた時が来ました。寿永四年春、平家一門は壇の浦に沈んだと云うのです。

資盛は、有盛、行盛ら、弟や従弟たちと手をとって海に入りました。二十六才の花の命ー覚悟はしていたけれど、右京大夫は茫然として涙も出ないほどでした。長いこと泣き暮らし、どうかして忘れたいと思いつつ、「あやにくに面影に身に添ひ」耳もとで彼の声をきく心地で、悲しみは云いようもありませんでした。もろともに死にたいと思いながら生き永らえてしまいました。来る年も来る年も、思い出はいよいよ鮮やかに、悲しみは深くなるばかりでした。

平家の人々の哀れな最期も幾つも聞きました。殊においたわしいのは女院ー海に沈まれたのを引上げられ、心ならずも生き長らえて出家、大原の里に隠棲されているのを彼女は訪ね、女院の悲しみをお慰めしつつ新しい涙を誘われます。その後、彼女は人にすすめられて後鳥羽天皇にお仕えしました。昔、若い頃お仕えしたおん父みかど高倉帝に、新帝がよく似ておわすのも感概深いものがありました。公の古い書類に、かの「さめやらぬ夢と おもふ人」資盛の署名が残っているのも彼女を悲しませるのでした。そうして彼女は老いました。

右京大夫の悲しみは、さきごろの戦争で愛する者を失った何十万の女たちにそのままかよいます。いま彼女たちはその思い出を抱いてつつましく老いていきつつあります。覚めやらぬ夢を抱いて老いるのが女のロマンなのです。（田辺聖子著〝おぐるま日記〟から。）

京都琵琶協会定例茶話会

①三月十三日(日)昼一時本部平井春嶺氏宅で開催。平年を上廻る温暖な春日和で病後保養中の木村、古谷、伊吹三氏の元気なお顔をはじめ左記会員が出席して数氏弾交のあと六月五日開催予定演奏会の各自曲目（十五分）と出演順の抽籤を行い談笑裡に小宴、七時散会した。（出席者）伊吹正陽、馬場鴨水、戸倉旭嶺、戸田旭公、田中鵬水、梅原旭濤、矢吹旭美津、安住旭康、山岡旭清、牧南水、古谷竟水、荒木旭媛、木村維水、糟師旭富、水内嶺水、平井春嶺、植村寞水。

②四月十日(日)昼一時同右。平井、水内、木村、荒木、古谷、牧、山岡、安住、矢吹、梅原、田中、戸倉、馬場、伊吹、植村の各会員出席、左記の通り弾交の後近くの桜の名所官幣大社平野神社の広大な境内に今を盛りと咲き誇る夜桜を鑑賞し料亭「きぬ」で小宴、八時散会した。尚矢吹女史の推薦で彦根の林田旭城女史が協会に入会希望の議を討議した結果全員承認決定した。

大楠公ー田中鵬水▼扇の的ー山岡旭清▼衣川ー梅原旭濤▼桜ー平井春嶺▼桜狩ー馬場鴨水▼別れの盃ー安住旭康▼巌流島の戦ー矢吹旭美津▼七卿落ー牧南水。

晴風会弥生例会

三月二十日(日)昼一時東京杉並区高円寺会館、主催浅野晴風氏。秋海棠ー晴風▼小栗栖ー諸遊清風▼噫八月十五日ー太田尾青桜▼旅ー中

山青礼▼吉野落(上)ー本橋錦颯▼弁内侍ー竹内寿風▼坂崎出羽守ー野口嶮水▼錦の御旗ー福島脹水▼桜花の詩ー中村晴声▼春望ー望月啞江▼景清(上)ー大関英子▼同(下)ー高田瑩水▼敦盛ー杉山旗水▼仁科盛信ー山下晴楓。

荻野甲水演奏会

三月二十二日(火)昼二時東京上野本牧亭。小督ー会主荻野甲水▼月下の陣ー丸山柴水▼屋島の誉ー畠山盈水▼城山ー秋谷葛水▼巡礼お鶴ー星野寛水▼羽衣ー野川瑞水▼井伊大老ー反町昇水▼川中島懐古ー井上抗水▼毒饅頭ー丸山笛水▼五條橋ー角田置水、大沢妙水、萩原景楓▼相模湖ー菊地甘水▼坂本竜馬ー斉藤初水▼文福茶釜ー宮川宏水▼秋色桜ー松本藷水▼異国の丘ー杉山旗水▼吹雪の敵ー河合排水▼伊豆の御難ー桑名洲聖▼宇治川の先陣ー小林総水、成田双水、青木玎水、菊間東水、木主韵水▼俊寛ー北沢来水▼巌流島ー佐藤釆水▼小栗栖ー杉本淳水▼別れの盃ー横溝瑋水▼川中島ー中谷襄水▼舟弁慶ー飴谷六水▼白虎隊ー山口速水▼重衡ー宮原琿水▼西郷隆盛ー谷暉水▼桶狭間懐古ー松田静水▼勧進帳ー鈴木琢水、高橋狸水、藤川晴水、平野鉦水、松本孝水。

三位研修会三月例会

三月二十七日(日)昼三鷹市上連雀公会堂。錦の御旗ー柏木篁道▼墨絵ー中村晃憲▼彰義隊ー清水源城▼滝口入道ー伊集院皷城▼旅順開城ー田戸桜丸▼白虎隊（会津大津絵入）ー坂本錦道▼常陸丸ー西村翼峻▼勧進帳ー山本隆水▼見学ー篠宮樓水。

琵琶・詩吟　旭登会演奏会

三月二十七日(日)昼金沢市能楽文化会館、主催若宮旭登女史。羅生門ー藤本旭舟▼衣川ー安田旭富▼二〇三高地ー長岡旭玲▼堅田落ー戸倉旭嶺▼赤穂の早打ー平田旭舟▼吉田旭操、原島、若宮・花道大江喬水社中▼大物の浦ー坂井旭蘭▼柳の精ー会主若宮旭登、三絃旭舟▼修善寺物語ー杉山旗水▼未練西行ー橋本旭司▼雪の夜ー原島旭粧▼白虎隊ー若水桜松▼若き敦盛ー旭登、旭粧、旭玲・立方二。外に詩吟詩舞十一題。

日本琵琶楽協会関西支部発足総会

三月二十七日(日)午後三時京都西大路駅前料亭京みやこ二階大広間に於て平井春嶺氏司会で首記が開催され東京本部から辻靖剛氏が吉川会長代理で臨席の外左記二十二名が出席、全員関西支部発足に賛成しその規約案に就て協議が行われて全案承認、事務所を京都市北区平野宮西町六四平井春嶺氏宅に置き役員に支部長山崎、副支部長平井、柴田、三浦、理事林田、秋元、佐藤晃紘、監事佐藤、白石、顧問松野紫雲、相談役松岡旭岡、岡部錦蝶、桝本、総務部庶務木下、会計伊勢谷、事業部企画矢吹、広報伊藤旭暢、小川、渉外楊、戸樫旭桂、三輪の各氏をそれぞれ選出し四時半総会終了、記念撮影に引続き懇親の宴が開かれ自己紹介を始め隠し芸などが続出し歓をつくしたあと協会本部並びに関西支部発展のため万歳三唱、六時半自出たく閉会された。

（出席者）五十音順、敬称略）伊勢谷安江、梅原旭濤、植村寞水、大野皓月、小川吟水、木下皇水、櫛田旭波、柴田旭堂、高千穂旭楓、田中鵬水、中島旭穂、林田旭城、平井春嶺、福西旭経、桝本旭風、牧南水、三浦蓮水、三輪栴水、山崎旭萃、山本嶺舟、矢吹旭美津、楊嶽水。

（註）関西支部は愛知、岐阜、滋賀、京都、大阪、兵庫、岡山、奈良、三重、和歌山、香川、徳島、愛媛、高知、石川、福井の十七府県に在住の各流派琵琶人を以て構成される。

筑前琵琶温習会

咲きも揃わず散りも始めぬ桜花らんまんの春四月三日(日)昼京都安井金比羅宮会館に於て梅原旭濤女史主宰の旭濤会温習会が華やかに開催され超満員の盛会裡に終始した。白虎隊ー中谷濤泉▼秋風故郷の山ー中出濤月▼常陸丸ー渡辺旭寿▼湖水渡ー田中旭洲▼衣川ー清水旭翠▼安宅の関ー山崎旭栄▼伽羅の兜ー岡本旭村▼本能寺ー高田旭章▼新撰組ー相良旭蟬▼那須与市ー国友旭香▼薩摩の乙女ー会主梅原旭濤（以下来賓ー順不同）竜の口ー田中鵬水、矢吹旭美津▼羅生門ー牧南水▼彰義隊ー平井春嶺▼加茂の宵月ー伊藤旭暢▼坂本竜馬ー藤原旭原▼若き敦盛ー団野旭兜▼大楠公ー竹本旭将▼あつもりー大西旭恵▼小栗栖ー西川旭操。理想的の春日和に恵まれお弟子さん達の素晴らしい上達ぶりと来賓出演各位の熱演が会場の雰囲気を盛り立てゝ成功をおさめ終演後関係者一堂に会し乾盃閉会された。

鶴彦会の豊川弁財天奉納演奏

好天の四月三日(日)朝十時一行十一人は三台のマイカーで浜松を出発。豊川弁財天三明寺は今年は十年目に営まれる弁財尊像の御開帳で住職の特別の要請により尊像の御前で柿沢篁峰（弁財天）、染谷鶴泉（武蔵野）、小野鶴彦（さくら）の三氏が謹奏した外書院で足柄山ー佐野▼由井正雪ー桧木▼花紅葉ー竹原▼熊野御前ー柿沢▽弁内侍ー高林▼小敦盛ー伊藤鶴麗▼鉢の木ー三上鶴浄▼桶狭間ー大石鶴伶▼乃木大将ー石川晶洋の諸氏が奉納演奏を行い境内満場の一般参詣者は拡声機で流さ